

LCC 就航後の国内航空運賃の分析

(研究期間：令和元年度～)

空港研究部 空港計画研究室

室長 黒田 優佳 主任研究官 鎌倉 崇 研究員 森井 達也

(キーワード) 国内航空運賃、実勢運賃、LCC就航、航空需要予測

1. 研究の目的と背景

航空需要予測は、航空政策立案のための重要な基礎資料である。航空運賃は航空需要に影響を与える要因の一つであることから、航空需要予測手法(予測モデル)には、普通運賃に限らず各種割引運賃など実際に利用されている航空運賃(実勢運賃)を路線毎に反映させる必要がある。航空運賃は、1990年の自由化以降、航空各社がそれぞれで設定しており、2012年の格安航空会社(LCC)参入以降、運賃体系は益々複雑になっている。本研究では、予測モデルに反映させる路線毎の実勢運賃を把握するため、近年の航空運賃について分析した。

2. LCC就航後の国内航空運賃の推移

航空旅客動態調査から得られる利用券種データを基に、路線毎の実勢運賃を推計した(図-1)。LCC

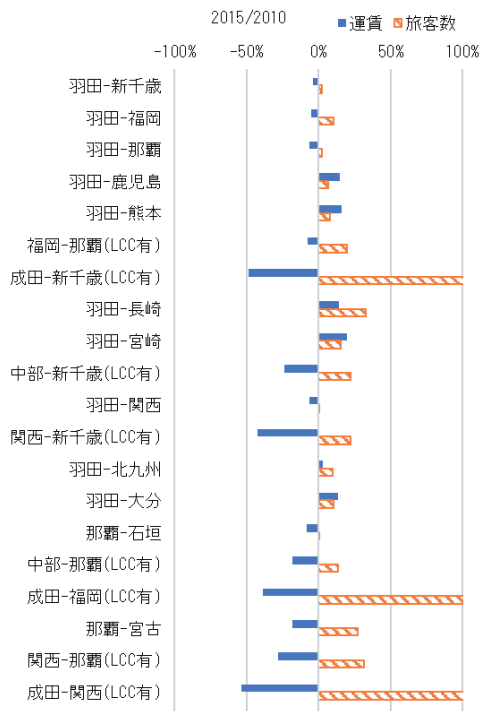


図-1 路線毎の推計実勢運賃と旅客数の変化比

が国内就航した後の2015年の推計実勢運賃はLCC就航前の2010年と比較し、多くの路線で下がる傾向がみられた。中でもLCCがFSC(従来航空会社)と競合する路線において、運賃低下が大きい傾向であった。

3. 航空運賃の季節変動や購入日による変動

路線毎の最安運賃の季節変動を比較すると、特にFSC路線では、多くの路線でお盆に運賃が上昇するなど変動が大きい傾向がみられた(図-2)。

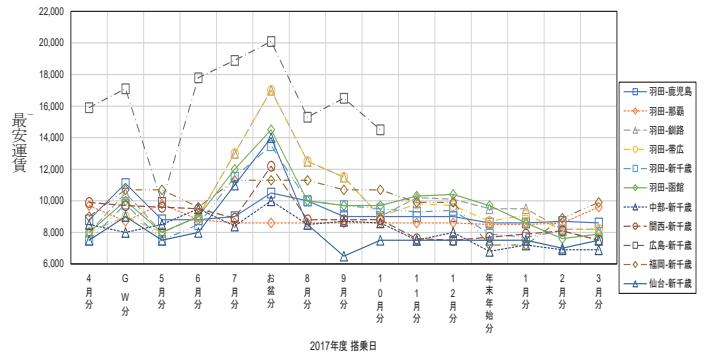


図-2 FSC運賃(最安運賃)の季節変動(2017年度)
出所) 航空局「航空輸送サービスに係る情報公開」より作成

また、同一搭乗月の運賃が購入日によって変化するダイナミックプライシングの状況については、航空局の統計から一部が確認できた。

4. 今後の展開

本研究を踏まえ、予測モデルでの航空路線別実勢運賃の設定方法について検討を進める。これにより、航空のサービス水準を適切に反映した信頼性の高い予測手法の構築につながるものと期待している。

☞ 詳細情報はこちら

1) 国土技術政策総合研究所資料 No. 1165
<http://www.ysk.nilim.go.jp/kenkyuseika/kenkyusyosiryou.html>

2. 社会の生産性と成長力を高める研究